

前  
入 学 試 験 問 題  
国 語 (文科)

(配点一二〇点)

平成十八年二月二十五日 九時三〇分～一二時

注 意 事 項

- 一、試験開始の合図があるまで、この問題冊子を開いてはいけません。
- 二、この問題冊子は全部で十九ページあります。落丁、乱丁または印刷不鮮明の箇所があったら、手を挙げて監督者に知らせなさい。
- 三、解答には、必ず黒色鉛筆(または黒色シャープペンシル)を使用しなさい。
- 四、解答用紙の指定欄に、受験番号(第一面二箇所、第二面一箇所)、科類、氏名を記入しなさい。指定欄以外にこれらを記入してはいけません。
- 五、解答は、必ず解答用紙の指定された箇所に記入しなさい。
- 六、解答は、一行の枠内に二行以上書いてはいけません。
- 七、解答用紙の解答欄に、関係のない文字、記号、符号などを記入してはいけません。また、解答用紙の欄外の余白には、何も書いてはいけません。
- 八、この問題冊子の余白は、草稿用に使用してもよいが、どのページも切り離してはいけません。
- 九、解答用紙および問題冊子は、持ち帰ってはいけません。

|         |  |  |  |  |  |  |
|---------|--|--|--|--|--|--|
| 受 験 番 号 |  |  |  |  |  |  |
|---------|--|--|--|--|--|--|

上欄に受験番号を記入しなさい。

## 第四 問

次の文章を読んで、後の設問に答えよ。

産業革命以前の大部分の子どもは、学校においてではなく、それぞれの仕事が行なわれている現場において、親か親代りの大人の仕事の後継者として、その仕事を見習いながら、一人前の大人となった。そこには、同じ仕事を共有する先達と後輩の関係が成り立つ基盤がある。<sup>ア</sup>それが大人の權威を支える現実的根拠であった。そういった関係をあてにできないところに、近代学校の教師の役割の難しさがあるのではないか。つまり学習の強力な動機づけになるはずの職業共有の意識を子どもに期待できず、また人間にとつていちばんなじみやすい見習いという学習形態を利用しにくい悪条件の下で、何ごとかを教える役割を負わされている、ということである。

中世では、学校においてさえ後継者見習いの機能が生きていた。たとえば、教師がラテン語のテキストを読む作業をする。あるいは文字を使って文書を作る書記の作業をする。それを生徒が傍で見えて手伝いながら、読むこと書くことを身につけていく。こういう事態を指して、フィリップ・アリエスは、『〈子供〉の誕生』の第二部「学校での生活」において、中世には学校はあつたが、<sup>バイテラ</sup>教育という觀念がなかったという。これの意味は、単に教授法が未開発だったために目的意識的な働きかけができなかったということではない。中世の生徒が、将来ラテン語を読み、文書を作る職業としての教師Ⅱ知識人Ⅱ書記の予備軍であつたために、見習いという方式がそれに適合していた、ということである。

これは逆にいうと、中世の教師は、近代の教師よりも、同時代の徒弟制の親方に似ていることを意味する。中世の教師は、テキストを書き写し、解説し、注釈し、文書を作る人である。その職業を実施する過程の中に後継者を養成する機能が含まれていたということが出来る。その意味では、<sup>イ</sup>中世の教師は、逆説的にきこえるかもしれないが、教える主体ではなかった。同様に中世の

生徒も教えられる客体ではなかった。両者は、主体と客体に両極化する以前の、同じ仕事を追求する先達と後輩の關係にあり、そこには一種の学習の共同体が成立していた。

後継者見習いが十分に機能しているところでは、教える技術は発達しにくい。まして、教える側の、教えられる側に対する働きかけを、方法自覺的に主題化する教授学への必要性は弱い。現に、教授学者<sup>ディダクティカー</sup>たちが出現するには一七世紀を待たなければならなかった。

ただし近代の学校においても、先達、後輩の關係が成り立つ場合がある。例えば、現代の代表的モラリストで、典型的な中等教員の一人であったアランは、リセの生徒のときに出会った教師ラニョーに対して、「わが偉大なラニョー、真実、私の知った唯一の神」という最高の賛辞<sup>さき</sup>を捧げ、さらに「帰依とは我らが驚異する者に対する愛のことである」というスピノーザの言葉を共感をこめて引用している。そのアランの生徒であった文学者モーロワも、「私が師と仰いだアラン、崇拜してやまないアラン」を讃<sup>たた</sup>えるために一冊の本をかいている。

しかしこの種の師弟關係は、おそらく、書物を読み、書物をかくことを職業とする世界の先達と後輩の間でしか成り立たないであろう。将来、知識人になろうとする生徒、もしくは結果として知識人となった者だけが、教師への帰依を語る記録を残すことになるのではないか。ラニョーは、プラトンとスピノーザのテキスト講読だけを授業の内容とした。アランは、ラテン語と幾何学だけが、人間になるための真の必須科目であると信じていた。そういう教師に、工場の技師や商社のセールスマン、あるいはふつうの社会人を志望する生徒が「帰依」するとは考えにくい。

ラニョーやアランのように「帰依」されることは教師冥利<sup>みょうり</sup>につきる。だから教師はどうしても、子どもの中に自分のミニチュアを見たがる。とりわけ学問好きの教師は、自分と似た学問好きの生徒を依怙<sup>えこ</sup>ひきして、しかもそれを正当なことだと考える。教師の人間像を普遍的な理想的人間像であるかのように思いなして、それを子どもにおしつける。そしてそれを受けいれない子どもに、だめな人間というレッテルをはつてしまう。しかし、子どもが教師の人間像を受けいれることは、生徒の大部分が教師後継者ではなくなった近代の大衆学校では、ごく限られた範囲でしか通用しない。

教師と生徒の關係のこの難しさに対処するために、近代の教育の諸技術が工夫されたということが出来るだろう。もちろんそれだけが理由ではない。近代人が、自然に対して方法自覺的に働きかけて、自然を支配しようとする加工主体であること、その近代人の志向が子どもという自然にも向けられた、という理由も見のがすわけにはいかない。しかし、子どもの自発性を尊重しつつ、なお大人が意図する方向へ子どもを導こうとする誘惑術まがいの教育の技術を発達させる動機には、やはり、後継者見習いの關係が成り立ちにくくなったという事情が投影しているように思われる。見習いの機能が生きていた時代には、大人は、たとえば子どもを理解しないままでも、後継者を養成することができた。それとは対照的に、近代の学校教師は、子どもを社会人に育てあげる能力をほとんど失ったにもかかわらず、いや失ったがゆえに、子どもへの理解を無限に強いられる。

(宮澤康人「学校を糾弾するまえに」)

〔注〕 ○フィリップ・アリエス——Philippe Ariès(一九一四～一九八四) フランスの歴史家。

○モラリスト——人間や道徳についての思索家。

○リセ——lycée フランスの国立中等教育機関。

○スピノーザ——Spinoza(一六三二～一六七七) オランダの哲学者。

○プラトン——Platon または Plato 古代ギリシアの哲学者。

設問

(一) 「それが大人の權威を支える現実的根拠であつた」(傍線部ア)とあるが、それはなぜか、説明せよ。

(二) 「中世の教師は、逆説的にきこえるかもしれないが、教える主体ではなかつた」(傍線部イ)とあるが、どういうことか、説明せよ。

(三) 「教師と生徒の関係のこの難しさ」(傍線部ウ)とあるが、どういうことか、説明せよ。

(四) 「近代の学校教師は、子どもを社会人に育てあげる能力をほとんど失つたにもかかわらず、いや失つたがゆえに、子どもへの理解を無限に強いられる」(傍線部エ)とあるが、教師が「子どもへの理解を無限に強いられる」とはどういうことか、わかりやすく説明せよ。